

- 1 靴尖らせて鷹狩を見に行かう――
- 2 フォーク眩しく涸川に刺さりけり――
- 3 日輪の痺れが麦の芽に移る――
- 4 鯛焼や崖はタオルのごと白く――
- 5 書けないペンで冬青空をこすつてゐる――
- 6 ヘアピンをつたはる鱈の港の息――
- 7 水鳥のうしろに鐘は現存せず――
- 8 首まはり寒しモノレールを浮かべ――
- 9 聖樹灯りて無声映画の戦艦など――
- 10 冴ゆる手はさぼてんの死をなぞりをり――
- 11 しはぶきを浴びし緑の魚の絵――
- 12 湯冷してアニメの未来都市尖る――
- 13 セーターや未明の海へ入る真水――
- 14 なはとびを鳴らしひときは薄い靴――
- 15 寒林へ鰐の匂ひを忘れゆく――
- 16 悴むや木の味の干貝柱――
- 17 夢に壁あり風花を匿はず――
- 18 立春の水路へ落ちてゆく羽毛――
- 19 梅東風の譜はみどりごの手を離れ――
- 20 山焼きて日暮るるまでの息の数――
- 21 チェロふかく鳴る風船の浮きはじめ――
- 22 こどもから黄砂へもどるときの声――
- 23 春の風邪とて木の椅子に顎置きぬ――
- 24 クレソンを目尻に地下にゐる一日――
- 25 紙皿のやうな現実春の雨――

- 26 音速は夜のはくれんを掠めけり――
- 27 喉渴きやすきピエロよ鳥曇――
- 28 山藤へつたなくも飛ぶガーゼかな――
- 29 葉桜のころ鍵盤は風を得て――
- 30 青芝に天使の痛覚のはなし――
- 31 そつとはじまる六月のル―ペの疵――
- 32 巴旦杏水槽を夜のまはりつつ――
- 33 エディブルフラワー膝に零しぬ梅雨の月――
- 34 手をひらききる色町を夏の燕――
- 35 プールサイドほくろに声があるとしても――
- 36 花氷よりメキシコが溢れさう――
- 37 涼しさや小鉢の底に舌が届き――
- 38 八月や礼拝堂は鱗騒――
- 39 夕焼雲造花の茎をもつと拭いて――
- 40 ビジネスの眼で噴水を消しながら――
- 41 傾きし文字は零れて雲の峰――
- 42 朝顔の摩耗つづきぬ日曜も――
- 43 ナッツ噛むほど三日月が冷えてゆく――
- 44 音階をのぼる野分の夜の塑像――
- 45 飛行機の写真へ梨をひとしづく――
- 46 朝霧に釘を打ちつづける痛み――
- 47 舞茸を拾ふや舌の力を抜き――
- 48 光る秋蝶へ光らぬ秋蝶は――
- 49 飛び降りるなら秋風の曲がるところ――
- 50 塗る前の壁を愛してゐた花鶏――

- 51 夜の祈りひとかたまりの八頭――
- 52 行く秋のキーマカレーに合ふ照明――
- 53 返答を待つ静かさの朴落葉――
- 54 手は粉にまみれて遠し神無月――
- 55 冬鴟の唾液をもらふプレパレート――
- 56 星空を不意に失ふ鼯なり――
- 57 渋谷寒夜だれかの声がまつすぐ来る――
- 58 いつのまに爪は毛布と睦みあふ――
- 59 砂を巻く風のキャロットビケット――
- 60 帯電したまま冬凧を飛んでゐる――
- 61 欄干が口を汚しぬ雪催――
- 62 どうかしてゐる歌留多にひらがなは群れて――
- 63 鯖酒に一縷の鯖の沈むまで――
- 64 白息や砂場に豹のゐてほしき――
- 65 幾つものドア炭ぬちの火を悼む――
- 66 葉牡丹へ歩む鳩ゐて鳩の思惟――
- 67 野焼の火とも纏足の少女とも――
- 68 花粉症手は精密に手を描き――
- 69 川沿ひの家ひとつづつ眠たき春――
- 70 歌詞生まれくる中庭の椿かな――
- 71 地下道は洗はれ春の鹿を待つ――
- 72 陽炎や菓子にふくらむ小さき胃――
- 73 蜜蜂来用途不明の硝子器へ――
- 74 菜種梅雨砂場の砂の量を思ふ――
- 75 髪染めて水に浅蜷がずつとゐる――

- 76 桜葉降る隣室の在る限り――
- 77 猫の子の舌が運んできた頁――
- 78 海芋から患部へ泡のつづくなり――
- 79 水中を黙の走りて杜若――
- 80 眠前の会話に蛭のゐた温度――
- 81 靴紐を結びそびれて夏至の鳥――
- 82 次に来る車の遠さブルーベリー――
- 83 囓む茎も無く風鈴の洞に棲む――
- 84 目覚めた部屋に知識のやうに金魚鉢――
- 85 音消して碁を観る夏の雨の匂ひ――
- 86 鮎よりも昏し都バスの天井は――
- 87 虹消えて虹より遠き電池かな――
- 88 トマトより溢るる真夜の歩道橋――
- 89 目薬を振るは祭の昂るころ――
- 90 日焼子やひらたき石を嗅ぎて抛る――
- 91 蝸へ無言の雲を寄せ集む――
- 92 淋しい文明また枝豆をつまみあげ――
- 93 菊日和呼気は煉瓦の壁に浴ひ――
- 94 くちばしへ駅の近づく秋の谷――
- 95 秋草にころんだままの古語幾つ――
- 96 色鳥やすべらかに減る飴の酸――
- 97 戦意喪失即霧をみごもりぬ――
- 98 ビーズ散らばる朝寒の甲板に――
- 99 曇天に鶉の芯の抜かれあり――
- 100 蘆刈つて肩甲骨は白いだらうか――